橋姫の社は宇治橋の西づめにあり。〔はじめは二社なり、一社は洪水のとき漂流す、今礎存せり〕

古　今　さむしろに衣かたしくこよひもやわれをまつらんうぢの橋姫　読人しらず

此歌の評説をもつて祭る神をしるなり。袖中抄に、住吉大明神橋姫の神にかよひ詠給ふ歌なりとぞ。清輔が説には、山には山の神あり、橋には橋の神あり、姫とは佐保姫龍田姫などに同じ、旧妻を橋姫になぞらふとなり。一条禅閤の御説には、離宮の神夜毎に通ひ給ふとて、暁毎におびたゞしく浪のたつ音のするとなん。玄恵法師の曰、むかし嵯峨天皇の御とき、をとこにねたみある女、貴船のやしろに七夜丑の時参りして、此河瀬に髪をひたし悪鬼と化す、これを橋姫といふなり。宗祇の説には、おもひかはしたる妻、立わかれて恋しきまゝに、なれも我れをまつらんと、はし姫を妻によそへてかこちいへる儀なるべし。又源氏物語に、橋姫の巻あり、これはなぞらへて書るのみなり、此歌に付てさま〴〵の儀侍れども其詮なきよし、定家卿も宣ひけるとぞ。又逍遥院殿の御説も、清輔宗祇のいふ所に同じ、佐保姫龍田姫橋姫これを三姫といふて、深き口授のあるよし、歌道の師によりて明らむべし。

新　古　あじろ木にいざよふ波の音ふけてひとりやねぬるうぢの橋姫　慈円

新　千　橋姫のおるや錦とみゆるかな紅葉いざよふうぢの河波　後宇多院